

前回個人研究発表まとめ

**「道徳の衝突とはいかなる現象か
—ブルデュエー的 Heterarchy という見取り」**

國本 哲史（本学社会学研究科修士課程）

本発表は、二つの目的を持っていた。一つが経験的倫理学における社会学的視座の必要性を提示すること。もう一つが道徳の実証的研究である道徳心理学の知見と、社会学が蓄積してきた社会理論を活用しながら、道徳の衝突という現象を説明することであった。

実際社会を根拠とし、道徳がどのように使われており、どのような役割を担っているのか。これを問うことは、自由な個人が社会的存在に移行するための媒体を明らかにするということである。何故人は既存の秩序を守るのか。何故人は時に秩序を揺るがせてでも逸脱するのか。これらは社会学の伝統的な問いである。Durkheim は、その媒体こそ道徳であると指摘した。何故なら道徳は人の行為を制約・促進する働きを持っているからである。

道徳それ自体については哲学、中でも倫理学が専門としてきた。実際社会を根拠とする以上は、報告者も経験的倫理学に属する。本発表では、経験的倫理学は実証性に欠くとし、道徳心理学がそれを満たしていると示した。しかし、道徳心理学も社会の複雑な網の目の中で生活する実践者としての個人の道徳を十分には捉えられていないとして、道徳社会学の必要性を提起した。社会学は実践者の関係の網の目を見るための観察方法、分析方法を発展させてきている。それを応用して社会的存在者としての実践者の道徳を聞き取り、分析していくべきであるということである。

ここで、心理学も社会性を取り入れた実験を試みているというご指摘をいただいた。当日は満足のいく回答はできず、心理学についてさらに研究すべきであるとの認識を正すことができた。しかしながら、権力や規範など、社会的な力は経験や場所によって多様であり、ある道徳的命題の選択に影響を与える可能性があるそれらの力を捉えようとする、ライフストーリー法や参与観察といった調査を、道徳の科学的な研究に取り入れることの重要性は変わらずに存在するだろう。

また、本発表では道徳を構築主義的な社会的体系であると定義した。社会における歴史的な経験や、対外・対内状況などの変化によって「～すべき」は変化する。「～すべき」の集合としての道徳体系は、その点で、時代や空間に相対的である。個々人は、そこから J.Haidt が示した「道徳的感情」に従って、道徳的命題を選択する。選択された彼らの道徳的命題群は、道徳的感情によって裏打ちされているため、道徳的な対立は感情的な対立へと行きついてしまう。

たとえば昨今の安全保障政策について考えてみる。道徳的命題「社会的弱者が最も損をするような政策を取るべきではない」（ケア）と「他国の脅威に対して自国を守らなければならない」（忠誠）は安保法制において対立する。このように、道徳はそれぞれ（価値）合理的であっても対立し得る。道徳的な

信念に対立する相手に対しては嫌悪感が生じると考えられる。つまり道德の衝突は、一方が非合理的で誤っているというわけではなく、お互いがそれぞれ合理的な正しさを有しながらも、道德的感情を伴う対立に陥りがちになる現象だとする見方を本発表では提示した。

ここでは、道德の説明に道德的感情を持ちだしてくるのは循環論法ではないか、と質問していただいた。それに対しては、道德基盤という道德的感情の生起をもたらす基盤があり、これも構築主義的に成立するとすることによって循環を回避していると説明した。構築のプロセスを解明することは今後の課題である。

その他にも数多くの有益な質問をいただいた。疑問が生じるポイントを把握し、丁寧に論じなければならぬ箇所を把握できた。